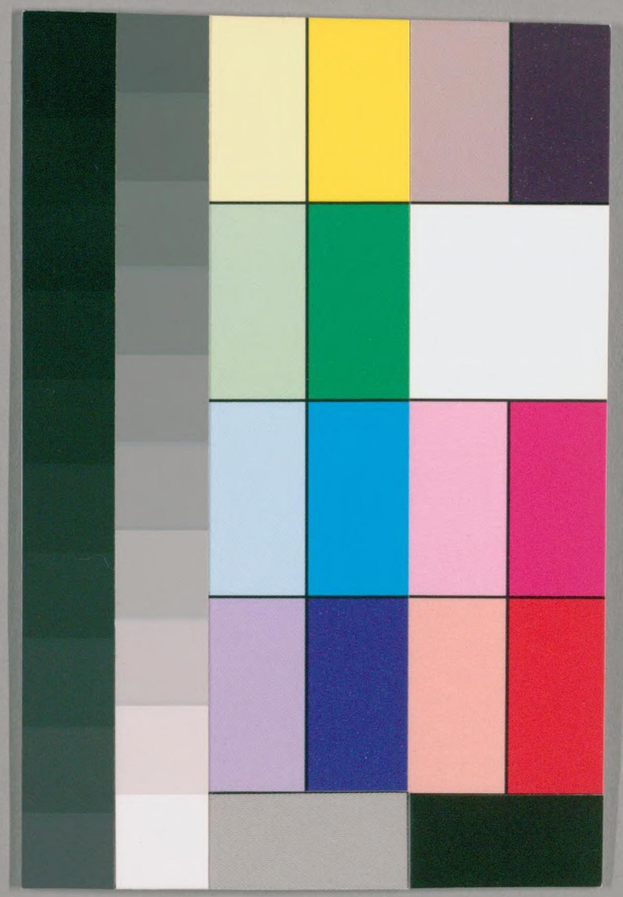


国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2

ガラス使用

864
2

夷國滑稽羽栗毛序

羽織藝者の天人から着物をかりの當
場の踊る大鵬は煮者はまみし鞍馬の
稽京にやつらん鶯籠は及ぶ一足飛
而てく童と増るを話ぶ丹もなし我な
嬉左の大人此志ましまの姫末をはぶりて

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2
ガラス使用

一差の草子を作る名て羽栗毛といふ
いでや馬道に馬を伺ひとも一刎は手際
に志くものは有べき鶴亀杏仆人玉の仲間
たゞ是ゆして殊更業容が新舞もなれば
翼なくて飛金玉ゆもかゝたゞ花弁
飛なる信徳は法初禱月にはる飛べよ弁

道の起ら雲雪を鷲毛に似て飛んだ箕
段はとまるべし昏流の風物を自由自在なる
此三千世界の大芝居に偶から偶の何も寄
密柑の皮は化物とのこと見ゆへかし
文化第四丁卯の歳しし孟春
狂蝶子文磨 應雪撰

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

目次

第一回　世中の盛衰田助無間の羽を生いてさいたひを得る　話

第二回　雷門の飛んぶり先生田助にあざむかまして空中を白眼　話

第三回　田助飛行を始て空腹に甚　烁葉の森浮世天狗系会の　話

第四回　田助兄文をさづかり初て東国にし　甚賢さる　話

第五回　老翁田助を古石塔にともなふ仙女の国中に入る　話

後編　第六回より十回にいたる

國立圖書館
昭 24. 3. 29 和
寄贈

夷国滑稽羽栗毛初篇

第一回　宇多樂菴嬉丸戯著

今は昔となん智華北東都浅草の邊に名を田助と喚し放蕩家ありけり。親の代には相應なる商人なりしが。いつとなく次第にに内外の都合あしくなりていまハ仕来の商賣も出来兼ねづかなる裏店に住居しが。兎角渡世に疎して朝夕の烟もたえぐなる間に色くと思案して見ても。いつもなき物は能智恵と銭金なりとハ思ども。いづまの

道ふも金くとどうり是夜の分別也とある間もなく。
やうくとおりひ出し。むかし聞柿が枝といつしハ後しき
憂川竹の所にして近頃不き来な鎧を受出さうの何の
と正直一通を。源左公も手鎧でなしともよきさうな物。
手形さるらしい事にいる金さへ手形詳なり出し例
もありしぞかし。我も鎧に引かへて夜の物ごに受出ひるのも
ならば。いくて見事ハ格好のよい業耀といふ物。それさく
出来る世間の諸。我ハ所さぎの一大事天下もあれこが

何もさうな物。むかしハ三百万ハ所を多くの事でもなし。
我ハ倍増にして六百万をさづかりたしとハ欲に目れ
なき独ゑこ。むかし人間ひぎでハ行まゐし家でこうなれ。
日頃近所に居るよしみ。いやといはれうが如ゝ
れうが。一寸八分ハ親方に無心をいはんと。取物もとる
何へぞいつさんに後草ちへ余請なし。一心にたゞ金のみ
をのこぞ念じける。まとり事手形鉢を見付んと思ふ
所に。事なるうな物手形くハ形に心ばきさく。よしく是

の内を人目おほくていらぐなり。夜みなりてころせしめん
物をとゝ。まづ墨山なり恒くと見ゆなりてもいまだ日ざし
も高しいつて吉原へ行て見せをひやかさんと思ひしが。
いやく待ちどし。此場にのぞんでそんな俗事なれば此あり
てを。大郎朱鈴も出のとなしとおもひかつし。兎に角
日の落るを待居たるに。径なく寺内の禅耳を驚かし。
楊枝屋のあねさん見せを出ゆつて小なる弁当ごとを
荷石分になし。お袋を屍に出けて出さいらしきもなり。

歯みがき豆蔵小見せ物さべて引とるたそがれなれども。
さほがせいなぐ人目の多して叶ひがたく。かれこれとさる
内に大分腹が小山となりし西君。垂屋の左右茶屋
せうか。いつそひねつて後茶併か。志らし石とでむねが
焼るであらう。此上焼てハ店鞋後千万いやくあるぞく
奇ぬく。正直のかうべに神佛の屋どこせかゝしまけぞ。
物ハいまひかゝなり。正直著書あそ出しなるめと。小馬
道へといそぎ行。早速六七歳をしたべしなひてく。焼らる

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2
ガラス使用

のこなぐら懐中の銭を見れば。十六文不足なれ。
少しいふくかくなれバ。かりるのも和尚見るく大銭小銭
夜間ぜてこと〳〵に拂銭をも見だしてかけ出さて不を。
家内の者気がなりあはり大喰する事を聞け
居るるすなれば。不し銭を見れば無れごとくに不足
なり。これ乗さなと追かけられ。何の苦もなくとらへ
られ。思ふさまに物をふされ。たらくの神事寺内を
さしれ乗てれ。きよろく服で見居させば。のちや

人目のおきを要時分ハよしと大慈大悲をふし拝く。
かの手水鉢の前へ行て。一心あやてひしやくおつとりしぐ。
是ハ鶏の和に柄がながし。是ハ面倒なりとふろに
打て形がなへし。是で学業間の譜をはく付る。此世ハ
ゐる事せめられて。未来ハ永し地獄のせめ。ことへ是ハ
日なし事書られ。夜ハ悪坂にくるしむとも。まゝ今色の
当りまへ。何とも思はぬ。だんなひく大事なひ。何でもかでも
むしやう事おがよかしんと。めつたおにおそるゞ。何事も

出さるやうさもなく。そこよあくよとさがせども。小判を
おいて小銭一文出ざれば。あまりの事に奥さめて。又ゆ
観世音をさい拝して。けしびいひしやく五六本あるを
持し有さ事を。ひきながらよくながめ「ア、俘世ヂヤ
なアと思ふ折しも。鄭通ひの賀篭の敷物もさぐ。
あのやうに吉原通ひする人もあり。我もそれにハ引くて。
六百両の金がわしさに。二八十六文で。ふたはけらせて。
四五ゆ十なりや。ふたあつされん。「でもマア。そうなひ所の

上ヂヤなア。わん丹おれがかうしたふた。なんの事ハねへぬけ
ぬくなりがけん。そをしたといふ形りだ。ホイむだにでもねへ。
ア、金がわしひなア。さうぢやく。なにけて居てハはじまらぬ。
石にもせよ。あつちの事も金がよし。少しにもかくにも同ざす
ぬる手形辞と。ひきやくをもつてて。行バ不景や
虚空なり。像にふり来るバラ〳〵。定て是も金なるん。
此器をたづさぬふらせんと。まほくひしやくおなるし。
あたるハぬけて株だらり。又上よりハぢらりくと。ぬり来る

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

「いやくあいつ人目にかくらバ一大事早くひろひ集んと。
先足もとからひろひ見るに。あちいかに金なんとも
思ひの外よくく見まぐ法堂に栖し鳩の羽なり。金と
羽とは其ことは語路ハかなしども。飛んだ熱間の新栄者。
あきまかへりしまどもなり。打ちら法堂の内にて大笑
の事アハヽヽしとする事に。是も嬉しぎと見あつりたるに。
法堂の内より法事高く「コレく田助くとぞよびかふ。
田助然ばかりにやう。迚も初しぬ事。まさに何なりとも

吟ん拙をと。法堂万迎く立ちりても見たるものゝ。うそ
氣味ころく。だん為りにてうづ為る。甚時又ゆ妙なる法
事「ヤヽヽ田助。再事もいたさだもや無りしや。よつくきけ。
汝も兎にかく金とのミヤせども。夫も皆人間界の
のぞむ不にして。中くたやまくハ出来ぬ事なり。夫ゆど
母金がわしくハ精出してかせぐがよし。とのしたらお腹な
たるまな。一躰手伴もなほけ者。なるけても金ハさぐけ
ふくい厚隆なるを。余りの不便さに。金のかたりに救ふの

羽根をなくしなり。銀のかたりになりといふのハ吟
されども。今は殆りに羽根などハ近頃新しからうが。
不せんなるけて業やうハ出来にくし。夫白色に羽根を
さづけしなり。手羽をもつて手細工に羽衣をあしらく。
夫を急て飛りなさば。金に成したる楽しみなるべし。
兎角人間ハ一生なるぞや。今もちろとてさのこ楽でも
なく。かつて苦労おほるべし。風にて吹ちらさぬ内ありて
其あつめてかつるべし。もめく鎖ふるなるまし。チンフイく

トまえぬふ「田助ハ兼ミしあちにて
おうぜんとしてゐるしが かくてたてじ。先何にも
せよ観音のをしへにまるせん物をとし。あらに三枚かしこに
五枚。むろひ集て引くり。又が家をさしてぞ帰りたる

第二回の話

かくて田助ハ件の羽を持かへり。かさだり物の事なれど。
まづ二階へあげ置きて。相ひとりはくぐとかんぐ見るに。
観音の御告にて。羽衣をあしらへろとの事なれども。
一体生れはいての不器用者どうしたらよからうな。

とつおいつの工ふうしるが「ハ、ア聞え申した。是ハ大きな夢中子なりと。
手を拵かゝ喉らんで、おさづけなされて下さるのであらう。
よくあんなふざけた夢中のおさづけのあるうるが場所ぶ
なア トいつゝ、ふがさうじん、あひてハ、ひぎつこだより わんさ一ヾア あんなひとりがあと
りふても側らうだ。是も笑ひ人もなし。かういふ事を
誰ぞ聞付なさりやらしかつうの子独ぶど川柳が句
に。屁をひつて、をかしくもなき独りゐよふよくいつたもの。
まあし今日も大ぶくたびれた。早く寝て拵らへを

拵らん トまくら引よせねいりしが 誰やらん門の戸を叩く者あり
定めて観音さまのお使ならんと心得て おのれのよ
「ねぼけ眼のなにアが 田助さん〳〵 モウ四ツまぎの事 して目をさまし
ア、 トあくび 「どんな事で羽ぶらし拵らへてもなんの
御利生もなく ねくいけぞんざいな御利生なら トふくれて
どうもつまらぬ事だがなしるが 「なんでも是ハ羽衣を拵て
飛んで天の上の御殿へやらさらして見れバ雷門の内へ
出る。たねより飛んだりかへつての親父にしのむか

上分別。さいさひ儲らしの事なれバ　ト右があけるうあけぬるさうそ
おやぢが「田ゆ」ぞうじ親方。おめへにちつと頼たい事が
恐ゆき
あるが。まづちよつと法なんで咄に不がかうよ。ひつちも
毎年くつまらねるすだらり。そこで弥次ら小八が去
似をして膝栗と出かけやうと おめへども。路銀を
なし足も近頃は小足にちよくだし事。志よ詮合でも
なけアや面白くなし。又ち今ハ知るに出来ぞ。今の
かたりに脱から羽をたんとめらひ申しのさ。まかしの

おめひ付ぐどうぞおめへにアノ羽衣を拵てめらひ。
夫を見て。飛んだりはねたり一刎羽栗毛と出かけやう
と思ひ申しが「おヤ又」見くめら皆内でゆるに及ばぬ。夫を
何よりの思ひ付サ。近年一九が膝栗の大当り。是ハ又
ち上をあれ羽栗毛。おほへの内あんじきめらくト
むしやうに「田ゆも大に　のりが来て　そんならおめへ。一日も早く拵て見て
おめらしき
くんなせ「おやぢ」ぞ面ぶんく。ひさしが又数年来お銀も
なきお猿に大色ひきがる。婦んぶく菜答や左頃気ね

さく四国をめぐらせる程をねらり飛ばりさせる拍。
清して羽衣をさせてとらう。お清へひとりハおろうのるす。
吏物子どもと二三人を飛べさうな拍。てアノなんにしても
かう味噌だらり何げる所ぐはじまらぐ。ちつともよく
させてやせう ト大きくのこ「田仲」それをありがてくそんなら
あこなれだ
内の羽をもつて来やせう ト さうそくあるとの「田」なんと
おねをもち来り
かうして見たら。ちつともよくさせてとてくれたらしも
例ならず手伝ぐひやせう よく〳〵 トたのなれ「おやぢ」も男子
のりし

かめ山の
それおもけは
いふうちる
鶴のまねまる
鳩れ
毛衣

よしさく　トぶんくさいくにかうしが例のふうて
ざいくのるすなれバ何の苦もなく出来あがり　○ぶんぶ是
にてハ羽根の法ひやう自由にならぬ。是るのもぐるひ
ひるし　トかの羽ごろもにねんじやくをつけ　ねの「おやぢ」なんとかう
あがきハひもにて法ふやうにらくあげ
出来て所ゑ青柳ぶらうどうぶく　「田ゆ」イヤモウどふも
いへやせん。手かたり おわくの事ならべ。どこ法でも使に
飛んぐ何げやせう　「おやぢ」コレく めつさうな。お法くは
とんぶるすだり。おきを一日休して。使ふ。やまとく
しても卧雲や三ノが物ハあるよ　「田」ぶんぶんく。それは

ひさしも承知くまづ何にしろ一番あんどいをんぶい
ト前なる明地くとり出し　かのねんじやくに
あきをとほしひもをいつしよに引かれぜ。妙なるなひよこそ
ト志ぜんと我躰地をたなれ。手おも白き事いはん
肩なく。おのとぶ知しぶ我をひとれてむせうにひけバ。
何の苦もなく向ふの屋根へト飛あがる　「おやぢ」ハ法ぶとは
あきれかへり
コレくく　トよべどむかふの「おや」天人ならバ事あそよう
屋ねと志て
しき丸損ハ志ないわ。あの野郎めに請もとしぶ
飛ばれてる。是こそ誰に飛んぶ災難。エヽ口をしや

トいふなりハまり子本にはねのはえたるを
おつかけたる鳥ぞ恵のごときありさまなり 此騒動にまん所
出なりの若尾たち 「若」 マアイく是ハどういふ訳ぞト
ゆゑて見たるおやぢハまたし志ほん親 「おや」 ひさしぶ細工乃
あきからの始まりをまつかりとはなしながら
菁好きを。アレ居らうじましあの通りに花ぞれまた
ト 残もとらぼに 「そばの大ぜんが」 ある ほど是ハとんじたよん
とられしを
お細工。イヤハヤどうもいへぬお上手く。志かしあいつを
とらまへて。ソレ家根へあがれの鳥さしの ト 下でハ大ぜい さうぎたちを
「田舎ハ上から見て」 是ハ葉の毒千万な事。志かし拂をする

小さ誘がなし。そして内にも何にもなし。かりる所
も志よせんなし。家に居て歪みくとらなる
理屈もなし。メてく巴なしの加賀く文句
ぞ。あんの是ぞ出来る。羽根の一徳イザ花びかけんト
かのひもを ひつしよにとり まづ先さ身ハおかたりト いふそえにて。むせう
小ひけぞ羽ぞたまして。又ヒヨコく ト とび出る。下にてハ 大ぜいがらんさうぎ
「大ぜい」 ソレ花出すハ。ソレ出るを。アレ花ぶ。ソレとぶヤレ花ぶ
ト いふ事に 親父も草中にらうを出し ロくを 「おやぢ」 ソレ なれぞ

飛ぶハ八郎子類なし。あし軽なる子なくなつたりト。
手をたゝいてよろこびしも高堂がうしとて飛んだ
咄しの評判〳〵

第三回 此話

扨も其内因助ハやうやう子飛び出す新まい天狗。
五六里も来りしと思ふ頃。「是ハ大ぶん手がくたびれ
たく。まづ爰らでお小体しやうかさと ト一だん
高い松の枝子 チヨイと止つて「ヤレ〳〵くたびれた。わらハ

余りあんじ上出来ぐが。しかしあの親父めがさぞがく
ちうびつくり驚るであらうが。モウかへりなつてハゆしく
ひうけ傷る気づかひハなし ト大ぶくのたけなれど「扨も
てア宮なぞとござらう ト下をよく〳〵見れど「ハテ余り程 [illegible]
飛んだとおもへど。まづ見づうのあひだであつたら。
此やうまでてる諸国を飛びあるくハさぞ [illegible]
まいらう ト [illegible]
「モレヘ聖天さま。親なる子おもひなさつてお序よ

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2
ガラス使用

よろしく　トやじきたあやしく「まづまよふハ腰がつかれて来て
なんぞうまき物をやらかしてくれんでハなんぎ後
面の文句じやアねへが。實ハ待乳の山中なるぞ。
めしを喰ずおなかハへつてならぬぞ。おらつてめんど
トあちこち見廻し向ふの方に店あり。
能く見るとじいさんが団子をやいて居るやうす。
「よしよし那にあるぞ。手前ゆゑハ早くせんと
松の枝にやつたハ見世の団子を買かけていつさんに

飛び出し。おかあくんどのよき枝へ飛びかゝり
あつちへんと「団子まかせやアおんぶ。看板の土のぶらぶら
ハテいまいましいが。モウおきとへらい臭ハもつて
めんど　トもつくりして見守「ヤレ天狗さまがだアまん
を嫌ふあらしさの。「ソレ小僧をさらつてお出なされ
この土の団子をあつくいつての
「アレく　あきて二丹今の天狗さまがお出なさる。ヤレ
おそろしやく　トりよ内　大きにあわてさまく能くなく

「ヤア」あの天狗さまのお鼻がみじかいそして
はむりハやつたり野郎あれは怪に疾ないなる事
へ鄭がけにでもお出なさる法ヨやうけんぶらう。不
思議く（トぶん〳〵けん抱人大ぜいになりたれば）田助も今はぜひなしと。
去の壹子をつかみ。どこをあてともなくとびいざし。
大智を目がけて。件の壹子が一度に下へと投げる
なげ付られて「ソレ天狗法ぶてよ国子つぶてよ。ワヽ
下にては
あるやく（トいふ内）早くもそこを飛び去つて。隙ヶ

まうせて。かの連じやくを引かんとせれども脇ハヘコく
力をなし。あいにく雪隠へ曲きなるしが「これ無事
奇妙な事てはなつたき。たまざてにしてくわんと
おかひ。ぐつと屁をまくり。もとよりも飛ながらのる
なれば。壹意舎紹もあらばてろ。心まかせに用をさし。
下の方をながしるに。下にはなるの所来の人く
或は天宮又は肩などへかうしが中に「さもあるまうなる おやぢ
アレ〳〵うれしや。鳥類に養をかけられると。

中よ運が来るとは上手ぞが。是でありがたし〳〵
ト あまりなりだく〳〵と なげれおつるをまであげて 「おかぢ ハテ なんぞり。今の名るを
とんだくさい義ぶ。はねの名るより白ひげひどい〳〵。
手かゝり運も又多からうちからん ト らいひあがり よく〳〵
どうしさま具さをあく〳〵。業をもふんでよ行くのも
其この「因卵も是よてせんの業をもうちをまとし八
気あみせしかども未でみ用る西山へと飯をくれた。
又あく〳〵と酒らん ト 去げりし森へ みりもちしら 抱あつて ゆうある

不ら ト よくし えはるせバ 猿茶の森なり「扨く時せよみ苦部
ても。又づら待のれ山から未つその本是を来てる読み
飛行八中く おぼつかない。さいはひ當ハ猿茶なれバ。
かの鼻高大先生ま初ねがひやて心よく飛行の
術をならはん ト かゝる深なる枝の枝へ小くなりて
留りて見ても宗あよる何も喰れず居るあと
なれど。 豚ハ大へりおよつはのて 木の上みるとまりがたく 去まででもめしも什扇
上から居ちて。豚でもわけるら周でも悩ましそう

大さるぎぶ　ト そろりくとやうくに　は形りにてくなるに
かくして居たらば。どんな目に何をうも言わざ。扨く
釣しそくれた所が。飛んだ法度ぬ所の上とは。おんに
は皇ぶらう　ト ひとり苦労をしそく　○秋葉の堂は縁の下へ
這ましみ。鼻高大先生のお出を。今や知そしト まつ
ぶに。いづくともなく大風さつと吹来る「まちや先生
もお出なるんト あもぐやうもぐ うかぐくと　法堂の内にて。おまたの
先生たちのお勢にて何やらんおもなしなさるな

縁の下よりそろりくとはひ出して穿ぶに「一人の先生
はてさし 薫いろなる 法てゑ ふてく　なんと夕辺の空が世界をどうぶの。
「今二人おんにあいつア大弓道よ。仲の町の格子とは
格別さ　なぞとらすを　きくて　「同郷　おかふ　やうし　ハテ　ふしぎ　名儀な事を
吹抜なたぶしを　廓中は女郎の天に背きし者
ありて。先生がたのお出ありて　おたぶしなされしう。
まにしても。お勢から出たのしは格子。やかく　は分
どものやうさなり。何にしろかし隠れて居るくもて

はじまらぬ。思ひ切つて お目をしかつ ト 様の子
たひ出しましを 「田」 へ、イハイ 高平 法めん下さり 為し
かぶめるし
ト ぜひと出れば 一坐 是ハ法院ありてびつくりなされ
法やうさなるが中なれ 「おもざしなかく笑しあさ 先せいのおけせこれ」 モシ
おめくハどうして 寄く其なさらくに 「田」 ハイへ、イ
私をちと お願が 法坐り 為して 案り 為しこへし
トハふ 「かたきなる今二人の 先せい去ろうでしく」 寄へ 今時分 俗物のあられ
ねへ 所ぶが。 寄し 是にもなんぞ 理室がどざりやせう。

何にも構まれねへ。モツト おつちくよつて 吐しなせくく
おんに 能く見まぜ。おめくも おつな拘を 差て居なさるの。
おつア又 吐せるぜ。サアく ト むせうに 出せるく 「田助もおれ
心おち付。まづ先生方れやうしてをながむまバ。おれいか丹。
天狗さみのやうなまでも法形りは 皆く常時流行の
短羽織に 拘しき 紐をむねのあたりで 引法めてむさん
ぶる法をかくな 「田助 まほくなおち付 ハイ 別な事でも
年ぜつをさぶめて
法生りません。私は 後者親世者の教によるを 為しこく

羽衣をあしらくまして。叶お山までも絲りまして抽の。
蓋花ふくり店ゆり清まで白元。何とぞあなたあがたの
おあなたみ店を給を持まして。モチツト早う自宅に
花だまでは店侍様ぬ。サ〻〻どうぞおさづき下さまし
ませうなるべ　なんどくねがひかなれば　惣坐中抽ぐ店笑ひ無く。
同人の先生　扨くおめへもまだ正出なめんだの。そんなに昔
労にする理窟にも何なるめへ。どうするめんだ。陥ぶん
手自宅に花不北侍様さづけるくあぞ下せうが

十九

まべて凡俗をもなまつる色に夜三度三度の行
が店ゆりやれ。それをどうぶといふに先世下に山屋
あるり北名匿を見よせておきの。ソレなんぞちよつぴら
としたる抽ぐ。又は近所だから武義やなるりで。吾々
の。とぞ清なる所が北国の魔界サ。其魔界の大門へ
呉をいれる所がむづらしゝサ。サアかの七軒のなるで。
むしやうに呼ぶまきサ。どうもなるぬへの。大門に入ってハ
事でとに宮ふとやら。ソレ論語よみの一物おや父さん

十七

いさらう酒蔵やしたアな。マアくまづらは夕ねく。トーふ
なぐら。サア そこで剛楽のよしみの何りがた逢まて。むげ
みもあらぎで。チヨツト寄ると。かくアがあんどのかごの
といやうをいふから。腰をかける。さるト御ぞくをほけて
出さてのを。呑ぐ居ると。天の岩戸ヂアアねぐが。神どもが
恋に見付くのがしやせん。むりに押付賣サ。仕方なしに
坐をまめてアると。サア悩しと夕ぼくとゞ同勢が
まんとねるやさてから。そこを切りぬけの大げへにして。

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

偽なんいざトいつて。婚やかくアやみんなが。モシ志の
間のも。あまをおさてくおまさあんはりむざいの。
おいさそしいの。アレヂヤア おうまさません。罪ぐさぜく
まさの。何のとむまやうにさてめるから。どうもうるせく
なれど。仕方なしにかの高楼へ上りやさのさ。勿論を
大皆どももドヤくとおしかちるト。見せぐ見付るの
がありやア。廊下であうのがあり。かの傾くがとりぐ。
ヲヤよくお出なんしたこそ。かしいさうにさうしなんし

がようざんさて。宮く和のお樂くに不美紀合はしろう
ざんせうが。あんなに思つて居なんさ相をせめて此廊
へお出なんしたお偽り。かけにでも時ちおよんなんして。
おいらんにも和どもにもうましがらしておくんなんし
なぞといふから。それをなんとうかとう。あつ加ぎん有
まじくなつて。身ぎく切つたにぐ。しらせにやつてから
あんまりあひが伝つたによつて。カノ形のやうさしが
ちつと思ひせぶりに物くまの形よ。そんなら又悪有

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

新う自分でも涼ひに出さうなめんどと泣を入れて
見る和が定めし自ぶんも飛たつやうにあるべからう
が。さうしねへでせ内中でつつちが行と。なんぶのかぶの
となぶらまるから。たるをたぢて居るべらうと。あつち
が推量してやりさ。サア其上からが大さるぎよ。こんな
もむきに色くと雲蔵をとりたがつて。いやめう素
のがせがしさうさ。それから極よくしてこんなけべして
仕まつて。寝和を定めやれ。是からが手行を活むと

活まねて思ひくの名言をうつくいもうと
いふやつさ。まづ一寸かう咲くと何のざうさもねへやう
ぶが。此降りがしたやせんとどうも自由に飛ぶるが
出来やせんのさ ト口へ活をとめて腐れたりぐしのおもなしなり ○定めて此先
生しちも。下界にしたる高慢の御居りに此お仲間へ
さそひ入まられたると笑面 田舎ハ弱をまげて少居るが 扨く
ありがたい御物がたりを承るものかな。何とぞ口わら
風ぜいの下級の者にも。先祖を行が出来ませうなら

サラハ店侍様の所がくどうもくで店中りまたらは「先生
何さまを様にむづかしい物でもなしさ。自然と出来やを。
志かしむづかしくない物でもわへが。以上侍の例のナ。
寿ゝ姉ゝなる所サ。おんは長咄ぞあるちくゆくのが
おそくなりだから「田」左やうなら。へ、お詞になるさ
中分で店中り店をが。マア一寸含るをいたしたら
「先生」おんはさうく。さつきうたべなさりやアいゝ。ちと
姉しつけだが。あまれ。きまれはたべなしさ。とまる

まんまを見だが。酒ハどうだの。マア後で志づら来
たんとたべなせへ。実にまだ咄したしをしてあげたし
だが。又あしたどうでお目にかゝりやせう。イザ如りや
せうの夢をまつかけ姉たび吹来あるしは。たゞ今を
通人と。見たる店姿一様に。羽たきしてぞ飛び
行ゝ話

第四回の話

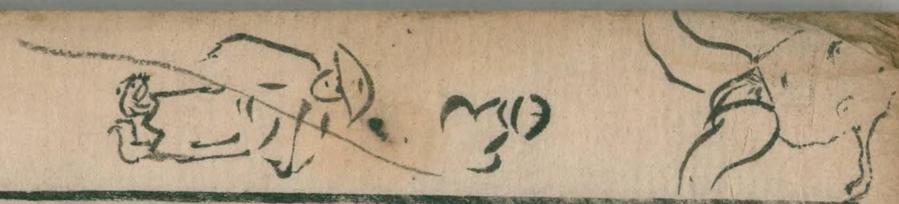
扨まらも田所をたべひとり雲海又あげた。「扨も

始しぎな事を見る物なあの先生方は何にお出
であつたか。まづなんにし御お和合をやしつのがらう。
口やうでは飛ぶ和はおいて。次あせダラ〳〵。腰がねけ
さうだと。腰びつを引よせてゐるは腰はどんとあり
是は歳付く。初めて言コリ笑を始くみながら。
むさやうは殘物を云込むまで。夕立はあひし干
見せのありさまなり。されど喧ひくたびまでしまつりく
と脱弃付しが。例の為の事のまちがで。悠く熱なる

店まだ一箇の先生あらはれ出。〔先生〕よいかなく。
余りは術を執出なる。他が出の石使さは。飛ぶ自
立の早持事を。ぬしは早くソレ。をしへあたつんなめ。
ひざく是は出けやしたのサ　トいひ〔田舎〕さらそく
コレハく謝はかりがたい仕合。わがふ和の一筆で出登
是ば何卒を不持事をナ。何がひたい物で出ずり
まれ。なんとう清くゆやせうが　などく書れながらいふ
もうべきなり　〔先生〕イヤまづ羽衣をとくと一覧致しや
なり

せう（トかの羽衣を出ちんの上）　田卵に呉せわひ毒を左右へ
己さつさせそく京師になまとの法を以て「その所先生
何やらん呪文を「田卵　耳をまはして　其文に曰トンビ
となくなるふ　きく所有
ヒイトロロウ　ヤレトヘトヘヨ。スマンギツハ力。との絵
と思へだ。却りも如しぎや毒羽がひ自由になつたる
希代の妙術。田卵もふたたびまもりが法ぶまさぐ自
先生のなかに毒を法ま　尻ぶり「田　却く口さくしる
ともうらぶも薄天狗の法慈悲をもつて。かやうに

羽がひの自由うを得ましたるす徒に〳〵おそれ
入つたる法をぎまもの種大芸を極ぐ。和しく密り
まれ「先　呉きく。何さ田宮とやう。なかも手やう
丹かたくあいさつを志なさつても。かつて毒が
毒ぶ。実に今皆と一座でいまやしたが。コレ呉を
見なせへ此おれを己されて行やしたる。為つて
己たる所が。おかへの形りがいやめうどうもあるまつ
ぽい形りだから。いつちが昔は仲男へ来て此分の



事をおもひ出さかしの事よ。又みんなが行給
よ。おのこされの。ぞうぜんとのこゝらしてゐるやうハ。
余り。ぞいやなめんサ。サアノくどこぞへあさびに
飛びなせへ。ひさしやア又当らぬへけりやアならぬへ
ト いづくともなく 「田助 つくづくと 飛ひさりなる かんがへこるに なるほど五重も出き
がなく舞が当まとぶいこものぞ。あまでおそ直
者ぞ ト おめらやう かんしんまるやう 姑しいあるりに。何所を何てとも
なく。飛出せしが 「イヤ 是をどうもいへね。ちつとも

苦がなく飛ろしといふを。扨く妙なめんぞ。なん
でもさつき先生がとなつしお徳を。見されぬやう
丹おぞんそく居て。何所ぞでおれも人丹をしくて今
めうまをせう ト。めう持まへの本地を出しかけ
ながら。扨くらいふもかまたぞ。やさうに飛行しが。
「まづあらうで休まんと思ひ 火の見へやぐらく 「敵人さもを 見ぶし
ソレ天狗さなが出なされて ト いふ月も 大きな大鼓
をどんとなるし々れだ。叶音にさんぶの田助も

ぎやう天して おもはざ さらば 座招より 噌ばし
て。あろ〳〵ト 落んとする 雨を やく中とり 「田」是ハ
思ひがけない ひどい目に あはせ おつた。さんでの事
に 命まで 落さうと 志る。家に 長居ハ ソレ子。
為方 おそ事 ト 飛び 付度ハ 今れ大鼓に あて
〳〵して。あまたもよくない。あまたもよくない ト。法い
伯り おそ事 て。ねむいながら に。飛ぶかと 其事ぐ
おとくぎに。其の夜の あまたやまくて。ひがしのこなとも
あらむ こう

いづくかう 「田」まづ 付急に やまくやせう ト 其身ハ 木になり立て
あらりを 見まれまに わたや 日本の地をはなれて。家
造り人物大に 和遠して 何りなれば。「よし〳〵 是
こう 勇ってはまちがのぞむ 雨ありし ト おもひ。
口の内 無く。先生に 伝授を 受しかの 児文を 唱
に 久しい 物 ざが 又 奇なりかな。心持せい〳〵 せしてく。
無頼の 匹人に 成しる 何んぞ ひ なり。夫より 雨 遊
其詩に おり 立て。法くぐと やうさを 見るに 兎角

是も縮やうに。夜は別して解き図の福地と見れば。扨
往来さるには駕籠はみんなで。大抵は小舟に乗て
通行さる。其舟の早きる矢をはなつ。さらにも
早し。其中舟の上におひをしたるあり。中には
あまたの奶人打のりて音楽のやうにて又妙なる聲
みて何ならんとふありさる。誠に象図とちがひ
風俗のめづらしきいたんかたなく。男女は有さる様
みるに。演舞なる男は。日本にいふ股引のやうなる

物を当年に通して見せて。又子共といへども六七才
みして。何やらん黒き小石のやうなる物を籠に
入て壹ありて。されどもいづれ男よりも女の方を
用ふる図とみえたり。扨ぶんぶんと向ふの方へいたれ
だ。大なる鳥居あり。其あたりより往来皆一同に
金銀の砂子をまきたるがごとし。其鳥居は大ぶり
て行るみづらにして。左の方に新をなしべし家居
あり。其内にも多の婦人等集りて。ろうより舞

ちり禰やうなるやうしてまづ家も打ちて行経丑。
又は棟高き大家あり。おまもも内にも婦人なみ
居て。斎うたひ酒ありなんどしてるに。田所も生
羨ましくなりて。不来に兼ての妙術を用ひ。
内へたひりて格子をたるに術のなりがたさ。誰も
咎め人もなし。誰に極楽世界もかくやらんとおもふ
ばかり。きらぐしきるもたとへん方なし。婦人の面に
甚しとだ大に笑なり。まづ「お前さま」を。おまたん。

「ひたくし店を。見てくら。」「お上りなさましを。お
あんないまし。」「左格で店中りまたを。さうぎいまた。
トいふ。又廿一二とも見ゆる婦人をも「子店荒」トよぶ。
手外あげてかぞへがたく。手国の方言。手道乃
合詞推量に知るもあり。置るがなくなれば口ゆる
ふくまに不在し田所術を用ひて手ゆるに出る所
の珍味を。皆初穂を喰ひ。酒も日本と書ひ美味
なる由也。是も志ならに打吾とれども。術にて所の

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2　ガラス使用

隠して居られん。是をも知らん皆めでたきなし。因師
あるは成て昔のまゝなき堂殿の龍蓋をまねられ
らるゝ子。ますます嬉しくて其場を立出。錦繍子
まるせて和田らしげ祀なく左の方に大なる宮あり。
一見せんと立寄りしが。また揃子借構さる階なく。
まだ開き社の宮殿なりしかば。婦しもぞ侍る。その
後の方へ廻れば。あゝ奴も縦しき茶屋あり内の
やしきをみる所。善尽美つくしたる山水の

珍味ども揃子酒を除のごとく肴を山とならべたるが
ごし。此角山子かくるためしもなかる有さまと見ゑたり。
只今飲食させしるすなるぞ。猫りありしとはくろんのがれて
立出。門前なる橋を渡りてんとし又は茶見世
ありされども家居も見苦しく今までのよふな相
違して。軒下もきくく何うむさくるしき有さまなり。
田舎事とやら「アヽ此茶見世なぞが日本なるぞ。
我ら不ぜんの所にふさはしと思ひ内へ這入ず

通りすぎ。そこより足にまかせて行程に。志ハるく
にして数万の石を積み。中にはこれを居ぐし
如くなるもあり。又向を見んやまぐ大なる高楼
あり。かの毛唐人の寐言にいつし五十歩百歩の
百理にて。やうりしても色性の地なるゞしと
思ひながらも。まづ夫は重くよと折垣にあちこち
とながめ行るに数十町にして道絶えたり。左りにて
巖ことにそびへし巖崖なり右は優ことなる其先

一銭の
拂ひ
やらね
呑くひ
腹ふくれ
とも
なるべ
をとらしき

侮なきだ。此時田助もいうんともせんさぐなくしぐ
ぐぐぜんせして不居たりける

第五回の話

かる所にいつくともなく白髪しろ老人忽然と
して小舟に掉さして出来り。田助を見て「侮る
何回の者ぞして。此所へは来りしにや」トいたくに田助
も恐びたびれ
たる折からなる由をいとり「田助」さまざまで此ぞりまた。やつぱ
あくぞ今尾に法いて
事は大日本の者ぞ此ざりまたるう去たろ吹き

流さまは法して寝ては来りましたぞ成ませう
ならば老翁さまの法めぐしをめちまして。へ、日本
最今の地くかへり変ぎまた
さうそくの「光翁」見たまく。まづ此舟に無ふ事よ。
我ホよまさやうにまたらさん ト田助を舟にのせて
漕ぐと漕ぎ岩石のめとに舟をよせ物かの表翁
大きな事「川三ア〳〵」トよふと一人の男立出翁と
よてく
何やうさやいて。田助をとめなひ。南蒙石を撥

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2　ガラス使用

のぼり。法子音ことる石場へあがりしるゆゑにて
ゆも五六軒北大家あり。其向中なる家に法世
行くかの男又奥の方を向ひてよびしろると
むとしく。二三人の姫人ニコくと笑ひながら出て来る
田邨をいざなひ。奥ふかく入りて。一ツの橋を渡
りぬ。又きれいく行て奇麗なる桜へつ世が姫人ハ
いづ世が行ぬ事久しくして前の老翁来りていふ
やうは「老翁」此地はたやせく凡夫貧客の来る

事ならざる古石場といふる仙境なて。家に余多
の姫人のおはしまれなり。其中に汝をのぞこゝなる
法方あらば。其財に垂れ仙女の法云にまてこゝに
なるし。さなき時には汝が一命にもおよびなんと
いひまて翁もいづくとも「跡に田邨をおとりさひしく。
なくしもさりぬ
法しく其かん見るに「ぶんしとのあとぞのもしく
しぐるにあらば。けれ例の妙術なんだ玉子ア
鞭の鼠薬ありとも其にあて命を果に事にて

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2
ガラス使用

あゝん。何なりとも思ふ子さまにまかしてをきまするん
抱ト女のひわざとおちあまはるゝ熟して一八九転ある童子出来て
今後を上覧をいたしまへん。随分と行儀面色よし
正しくして打擲ずし けちもなきなぬ 兎角切口上なる
る此国の風俗にやと。不審も君やくぞ入門まづく
まやくしぢ言葉にまらせん抱をト 江戸風にえんかんをた〻ろひ月ヤにを
よう卑しかく威光を遠ざけ多の足きにしてぶん〳〵と
こぶしく〳〵まち居られみ。
近よつてまゐりくあなたの障子のめをまなり まてで

指をさぬつて障子へ穴をあけ。何なかやきしやきうふ
やうも。ぢつくりして向ふなるふすまを寄りてさツと
引けば。子ども一間を一間ぐる。一面に絵屏風を
立てゝあり。いかにもお座しきなれども。似合うお茶中より
るかびし婦人あまると見えて おとなりふるべチヤ〳〵
ペチヤ〳〵クチヤ〳〵として きこゆるが。井戸御とも申して
手内田所なる噺家の口上をば、絵かうやうにまるみをつい
て。話しくとして居るが。極楽〳〵たちのふすまを

一度にして切りたり。先ずきまくまやつら見立ものしと見えたりと却ひ。又ひとり抱さびしく居たりしが其でに日も西に傾きて。從て心ぼそく有人の後家の軍などかれ出しとる甚打ち。あまたの奴人出来り「まづお風呂をめし清せのイヤ皆膳のト立かたりいりかたり色ことの黄味名所の食意どもなき間もなくおなくなるふさ面をさて明て。頭のやうに異なる者なんなのやうに細なぐき

箱を持て出来り田所を見て[illegible]そら笑して。[illegible]の者件乃箱なり何やらん立り出まで。甚さる日本にていふ柄物の大なるやうな物にて細き糸を引たりて。是を打なりして誰に希れなる者にて志かも大者者にキヤツくしとうたひ又給にてハ影に何やらん出て物いふ者俗乗を風とけにかけたるやうな者さるかと思へば今かもしびり殺きれんとする者者をも出し

19828

文化四年
丁卯孟春

桃陣房太助藏

發行

864
2

神田區末廣町九 御成道
遠　堂
様

国立国会図書館　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』 請求記号 864-2
ガラス使用

75

国立国会図書館　　タイトル『夷国滑稽羽栗毛』　請求記号 864-2

ガラス使用